

宮城春意の学問と著述(一)

——『六根清浄大祓浅説』の解題と翻刻——

高橋 美由紀

はじめに

近世初頭の儒家神道のさきがけとなったのは、林羅山が提唱した「理当心地神道」であることはよく知られている。しかし、羅山の神道説が近世前期の神道思想の新たな展開の上でどれほどの影響を持ち得たのかという点になると、否定的な見解が一般的であろう。羅山の神道説は、寛文以前の板行と見られる『本朝神社考』、正保二年(一六四五)に板行された『神社考詳節』等により公にされているが、これらは神社史研究が中心であり、神道説については断片的に触れられているに過ぎない。羅山の神道説が体系的に著されているものとして『神道伝授鈔』が著名であるが、写本として伝わるものであり、公にされたものではない。『神道伝授鈔』が、羅山による「神道奥義の秘要」の切紙伝授を冊子にまとめ酒井忠勝に進呈されたものであることを明らかにした岩橋小弥太氏も、「此の切紙はたゞ忠勝ばかりに授与したものは勿論考へられない。切紙と小冊子と多少相違してゐるところから考へると、恐らく他の人々にも幾らか授与したものに相違なからうと思ふ」と述べて、切紙が存在する以上、神道伝授が実際に行われたことを認めつつも、「羅山はわざわざ建立した理当心地神道説を掲げて、どれだけの活動をしたであろうか。彼の行状には其の布教については何事も語つてゐない」として、その活動が積極的に行われた形跡がないことを指摘し、「羅山の神道説は要するに近世初期の神道界の知的な傾向の一面を示してゐるもので、それはたゞ歴史的な興味を惹き起さしめるに過ぎないのであらう」と結論づけている⁽¹⁾。

羅山が、神道説の流布をそれほど積極的に行わなかつたことは、東北大学附属図書館蔵の『神道伝授書』によつても窺い知ることができる。本書は、前掲の『神道伝授鈔』の写本であるが、その奥書には次のように記されている。

林道春纂述此編、以猷源君忠勝酒井讚岐守。其稿則深藏箱底矣。兩人共秘而無有世視之者也。然道春近侍之徒、間窺其他出、而潛書一行二行、或一句半章、積月累歲、終以得為全焉。頃年僕嘗聞本朝古今之儒、博學強記、無如於道春者矣。顧夫広才如彼而豈有不知於神道之可崇敬、釈氏之可排斥者也歟。蓋忠勝者、素重仏教、甚愛僧侶。故順其心、而此編猶雜浮屠氏之說矣。朱紫混淆、邪正不分。僕甚惜之。然無所避焉。書写如本也。而聊記所以伝来之始末、請君正之云。

寛文第四歲次甲辰正月日 摂陽牧隆元農叔謹書⁽²⁾

これによると羅山も酒井忠勝も『神道伝授鈔』を公にすることなく秘藏していたため、やむなく近侍の弟子達が羅山の留守中に秘かに転写したというのである。羅山が何故に「理当心地神道」の宣布に消極的だったのかは明らかではないが、この問題を考えるに当たっては、家康の靈を日光の地に山王一実神道形式で鎮祭し、幕閣において重きをなしていた天海の存在を無視できないであろう。

このような事情に鑑みると、羅山には特別神道面での弟子というものは存在しなかつたようにも思われる。そんな中で、唯一羅山の弟子を名乗り、神道関係の書を公にしたことで知られるのが、ここで取り上げる宮城春意である。彼は、知られる限り神道関係の著書を三冊刊行しており、近世前期における理当心地神道の歴史的意義を考える上で欠かすことのできない人物と言える。その割にはこれまで十分な研究がなされてこなかつた。そこで本稿では、その著作の一つである『六根清浄大祓浅説』を翻刻するとともに、その思想について若干の考察を加え、今後の研究に資することとしたい。

一、宮城春意の人物像

宮城春意の名は、昭和十年に宮地直一・山本信哉・河野省三の三氏によって編纂刊行された『大祓詞註釈大成』上中下三巻の下巻に、彼の『中臣祓纂言』が収録され知られるようになった。河野省三氏は本書の解題のなかで、春意について

著者は儒学を林羅山と父隆意とに学び、又吉田家の宗源神道を学んだ関係上、本書の説は、大体、吉田家即ち卜部系統の所説に属し、羅山の見解にも近く、先づ穩健平穩で、別段、嶄新な解釈も無いが、非難すべき点も少い。春意は字は子誠といひ、静亭また艸古木子と号し、此の書の外に、神道大意演義一卷、六根清浄大祓浅説一卷等の著があつて世に行はれ、神儒一致説を主張してゐる。

と述べている。次いで、昭和十二年平凡社から刊行された『神道大辞典』の「宮城春意」の項には、

名は孚、字は伯実。林羅山の門に学び、儒を以て伊予松山侯に仕へた。『中臣祓纂言』『神道大意演義』『六根清浄祓未抄』『六根清浄大祓浅説』（各一卷）の著者。

とある。ここに上げられている著書のうち、『六根清浄祓未抄』については『国書総目録』にも書名が見当たらず、不詳。これらの説明によれば、春意は伊予藩に仕えた羅山門下の儒者。同時に吉田神道をも学んでおり、その神道に関する見解は羅山に近く、神儒一致を主張していることになる。春意の伝記的事実は彼の著書以外、依拠すべきものは今のところ存在しないようである。そこで、彼の著書により、前記の記載を確認すると、まず、名の孚、字の伯実は、『六根清浄大祓浅説』冒頭の「題辞」に自ら、「武藏⁽⁴⁾登客宮城孚伯実」と記している。また、子誠と静亭については、前者が『中臣祓纂言』冒頭の「発題」に「武陵⁽⁵⁾処士宮城孚子誠」と自署されており、後者は、『中臣祓纂言』に付記された弟宮城隆治の手になる「題⁽⁶⁾中臣祓纂言後」の中に、「我兄静亭先生」とあることによる。ただ、「艸古木子」の号については、「神道大意演義」冒頭の「神道大意演義叙」に「東武苦李齋宮城侗士散逸手記」と自署していることから、「苦李齋」とすべきであろう。この他、「萩花堂人」（『六根清浄大祓浅説』）、「萩花塾人」（『中臣祓纂言』）なども称している。

父は隆意といい、春意は最初、この父から学問の手ほどきを受けたという。また、雄山と隆治の二人の弟がいたことが、『中臣祓纂言』の「後序」によつて知られる。

春意の学問については、初め父に、後には羅山の門に学んだとされているが、これは『中臣祓纂言』冒頭の「発題」に、

昔者吾師羅山林先生。撰⁽⁷⁾中臣祓抄二卷。以下空海訓解。卜部清家旧抄。混⁽⁸⁾雜⁽⁹⁾積⁽¹⁰⁾氏。失⁽¹¹⁾宗⁽¹²⁾源⁽¹³⁾本⁽¹⁴⁾意⁽¹⁵⁾。故校⁽¹⁶⁾索⁽¹⁷⁾神⁽¹⁸⁾書⁽¹⁹⁾并⁽²⁰⁾朝⁽²¹⁾廷⁽²²⁾旧⁽²³⁾記⁽²⁴⁾。而⁽²⁵⁾新⁽²⁶⁾抄⁽²⁷⁾解⁽²⁸⁾。多⁽²⁹⁾所⁽³⁰⁾発⁽³¹⁾明⁽³²⁾也。惜哉⁽³³⁾罹⁽³⁴⁾丁⁽³⁵⁾酉⁽³⁶⁾之⁽³⁷⁾回⁽³⁸⁾禄⁽³⁹⁾。不⁽⁴⁰⁾行⁽⁴¹⁾于⁽⁴²⁾今⁽⁴³⁾世⁽⁴⁴⁾矣。僕⁽⁴⁵⁾受⁽⁴⁶⁾家⁽⁴⁷⁾蔽⁽⁴⁸⁾隆⁽⁴⁹⁾意⁽⁵⁰⁾先⁽⁵¹⁾生⁽⁵²⁾之⁽⁵³⁾命⁽⁵⁴⁾。自⁽⁵⁵⁾髫⁽⁵⁶⁾髻⁽⁵⁷⁾来⁽⁵⁸⁾。業⁽⁵⁹⁾儒⁽⁶⁰⁾術⁽⁶¹⁾。且⁽⁶²⁾注⁽⁶³⁾心⁽⁶⁴⁾於⁽⁶⁵⁾宗⁽⁶⁶⁾源⁽⁶⁷⁾之⁽⁶⁸⁾神⁽⁶⁹⁾道⁽⁷⁰⁾。由⁽⁷¹⁾是⁽⁷²⁾欲⁽⁷³⁾為⁽⁷⁴⁾中⁽⁷⁵⁾臣⁽⁷⁶⁾禊⁽⁷⁷⁾解⁽⁷⁸⁾。不⁽⁷⁹⁾遑⁽⁸⁰⁾編輯⁽⁸¹⁾焉⁽⁸²⁾。（傍線、筆者。以下同じ）

とあるのに依るものと思われる。矢崎浩之氏は『日本思想史辞典』の「理当心地神道」の項の中で春意について、

林家外部にあつて唯一羅山の神道説を展開したのが宮城春意であつた。彼は寛文年間に『中臣祓纂言』『神道大意演義』などの神道講談書を出版した。たびたび羅山神道に言及している。

と述べて「林家外部」の人とし、羅山門下とはみなしていないようである。確かに、氏が紹介している林家への入門者名簿である『升堂記』（東京大学史料編纂所蔵）の文敏先生（羅山）の条には宮城春意の名は見当たらない。しかし、本書は十八世紀末から十九世紀初め頃の成立とみなされているとのことであるから、本書に名が載せられていないことは春意が羅山直門でなかつた決定的証拠にはならないであろう。春意自身は、『六根清浄大祓浅

説「冒頭の「題辭」に「吾、師夕顔巷林先生」と記すなど、著書のあちこちで羅山を師と称しており、羅山の『中臣祓抄』の焼失の事情などにも通じていることなどを併せ考えると、羅山の下で学んだものと見てよいのではなからうか。

次に、吉田神道を学んだとの解題の記述であるが、これは『中臣祓纂言』の序に、

余弱冠。神祇大副卜部某。到于吾大舅塩村氏養中子宅。講中臣祓云。昔者我家講此祓。一日講一段。総十有余日了。今者不然。

とあるのに基づくものであろう。ただ、この記事は二十歳の頃に吉田神主の『中臣祓』の講談を聞く機会があったことを語っているに過ぎない。彼が吉田神道を本格的に学び、その伝授を受けたかどうかということになれば、おそらくそうではあるまい。というのも、彼はその著書のあちこちで吉田神道の非を指摘しているからである。たとえば、吉田神道で「祓」を「扱」に作ることにについて、「卜部家の無知妄作也」と批判し、さらに、兼俱にいたっては、

従二位卜部兼俱、是ハ、先祖兼延ヨリ、代々吉田ノ神主ニテ、卜祝ノ役ヲ勤ム。兼俱ニ到テ、神道ヲ、仏法ニ引合セ、其術ヲ解脱ス。誠ニ天兒屋命ノ罪人ナリ。

と厳しく指弾されている（『中臣祓纂言』）。

思うに、彼の立場は一貫して儒者であった。『神道大意』が、我国の神道こそ儒仏を含めたすべての道の源であると説くことについて、春意は、

兼直ハ元ヨリモ。神職ノ者ナレハ。我神法ヲ立テントテ。広大ニ書セリ。儒仏ノ二教モ。神道ニヨリテ起ルト云ハン為ナルヘシ。夫兼直カ知識ヲ以テ吾儒ノ蘊奥ヲ得ルコトハ難カルヘシ。斯人ノ先祖中臣鎌足モ。南淵先生ト云フ儒者ニ。業ヲ受タリ。儒術ヲシラスシテ。神法ニ通スルモノハアラジ。学者不レ可レ忽也。（『神道大意演義』）

と述べて、儒教こそ道の根本であり、儒教を知らずして神道を理解することはできないと主張している。さらに、『神道大意』において釈迦と孔子が一括して論じられていることについては、「コ、ニ孔子ト釈迦トヲ。同一ニ称スルコトハ兼直カ知識駁雜ニシテ吾道ヲ知ラサル故ナルヘシ。吾道トハ。儒者ノ道也」として、「吾道」たる「儒者ノ道」を兼直が知らない故であると批判する（『神道大意演義』）。これらの言辞から見ると、春意は自ら儒者であるとの基本的立場に立っていることは疑いない。羅山同様、儒教の普遍性に基づく神儒一致の立場から、神道、すなわち当時支配的であった神道教説である吉田神道、を批判的に検証しているとして大過あるまい。

最後に、「儒を以て伊予松山侯に仕へた」との点であるが、これは『六根清浄大祓浅説』にある、次のような彼自身の述懐に基づくものであろう。

余昔シ一柳山城太守源直治ノ佳招ニ應シテ。豫州小松ニ。赴キ。論語并古文眞寶ヲ講談ス。直治ノ采邑ニ。高賀茂大明神ノ社アリ。其神主ヲ陸奥

守藤原重富ト云フ。重富直治ノ命ニ依テ。余力旅館ニ來テ。神道ヲ聽ク。重富余ニ請ヒ。高賀茂ノ拜殿ニ於テ。中臣禊ヲ講釋セシム。來リ聽者五十輩アリ。講談了テ。重富六根清淨大祓ヲ持シ來リ。是城州下賀茂縣主某ヨリ傳來スル處ノ祓ナリ。ト云フ。余披見スルニ。大抵卜部家本ノ如クニシテ。文句少々カハレリ。

これによれば、春意が赴いたのは「松山侯」のもとではなく伊予の小松藩で、その二代藩主一柳直治の招きによるものであった。一柳直治は伊予小松藩一萬石の二代藩主で、寛永十九年（一六四二）の生まれ、四歳の時、父直頼の死によつて襲封し二代藩主となつた。山城守に叙せられたのは万治三年（一六六〇）のことであり、翌寛文元年二月にはじめて領地に赴いたというから、春意が小松藩に向いたのは、寛文元年以降のことである。しかも、この書きぶりからすると本格的な仕官ではなく、短期的な逗留ではないかと思われる。また、『論語』や『古文真宝』の講談の他に、中臣祓の講釈をも行つており、すでに神道への造詣も深かつたことが窺われる。ちなみに、彼の『神道大意演義』『中臣祓纂言』『六根清淨大祓淺説』の三冊の著書が相繼いで江戸の中野半兵衛から板行されたのは寛文八年（一六六八年）のことである。

二、『六根清淨大祓』について

『六根清淨大祓』は、中世末から近世にかけて広く流布した祓詞である。その内容は、伊勢神道の清淨觀、仏教の六根清淨思想、道教の身体論などを取り合わせて成り立っている。この祓詞の成立については長らく不明とされてきたが、出村勝明氏により、吉田兼俱によつて作られ、吉田神道の教理体系や儀礼の中で重要視されたもので、以後、代々吉田家に伝えられ流布したものであることが明らかにされた。出村氏によれば、この祓詞は「六根清淨神宣」「六根清淨太神宣」「六根清淨太祓」「六根清淨太杖」「六根清淨加持」などの様々な名称で呼ばれ、内容を構成する詞章の順序や字句にも多少の異同が見られる。出村氏の挙げる吉田家歴代の詞章と、春意の『六根清淨大祓淺説』の詞章を比較してみると、祓詞の呼称及び詞章の面で梵舜以後の吉田家のものと一致していることが知られる。『六根清淨大祓淺説』の本文の詞章は次のようになっている。

六根清淨大祓

天照皇大神乃宣久。人則天下乃神物。須掌静謐。心則神明乃本主多利。莫令傷心。是故。目仁諸乃不淨不見。心仁諸乃不淨不見。耳仁諸乃不淨不聞。心仁諸乃不淨不聞。鼻仁諸乃不淨不嗅。心仁諸乃不淨不嗅。口仁諸乃不淨不言。心仁諸乃不淨不觸。心仁諸乃不淨不觸。意

仁諸乃不淨平思平。心仁諸乃不淨平不レ想。此時仁清又潔幾傷阿利。諸法如レ影像。清淨無レ假穢。取レ説不レ可レ得。皆從レ因業生。我身彼則六根清淨奈利。六根清淨奈留我仁。五臟乃神君安寧奈利。五臟乃神君安寧奈留我仁。故仁。天地乃神止同根奈利。天地乃神止同根奈留我仁。故仁。萬物乃靈止同體奈利。萬物乃靈止同體奈留我仁。故仁。所レ爲無レ願而不レ成就二矣。

なお、梵舜（二五五二—一六三三）以後、下部兼雄（二七〇五—一八七）、下部兼原（二七四—一九九）等、吉田家伝来の祓詞は、「六根清淨太祓」と題され、末尾に、「無上靈宝 神道加持」の語句が付されている等の若干の相違はあるが、その他の点は全く変わらない。

春意の師、林羅山も六根清淨大祓に関心を抱いていたことは、その著作のあちこちにこの祓への言及があることによっても確認できる。たとえば、『神道伝授鈔』には「六根清淨之祓之事」の条があり、

一 目ニケカレヲミテモ心ニ見ス。耳ニケカレヲキ、テモ心ニキカス。口ニケカレヲイヒテモ心ニイハス。鼻ニケカレヲカキテモ心ニカ、ス。身ハケカレニフレテモ心ニソマス。一念オコル所ニコルト云トモ、後念ニキサ、ネハ、ソノニコリ其マ、ヤミテキヨクナル。キヨクアキラカナルハ神ノ心ナリ。

一 色ハ目ヲミタル。声ハ耳ヲミタル。匂ハ鼻ヲミタル。味ハ口ヲミタル。欲ハ心ヲミタル。此ミタレナケレハ清淨ナリ。

ハチス葉ノニコリニソマヌ心モテナニカハ露ヲ玉トアサムク

一 声ヲキイテ心通シ、色ヲミテ心通シ、ノミクラフテ味ヲシル。此心理ニソムカサルハ則神ノ心ナリ。

と記され、祓詞の核となる言葉を略説している。また、「大織冠敬白文」の条には、

延喜式ニノセタル祝詞多シ。其内、六月晦日ノ大祓ノ末ノ詞ヲ少シ改メテ中臣祓ト号シテ、中臣氏・忌部氏・卜部氏・巫祝ノ輩、世ニトナヘ行フ。

又、六根清淨ノ祓ノ詞アリ。作者タシカナラス。此中臣祓ト六根清淨ノ祓トハ世ニアマネク申コトナレハコ、ニシルサス。

とあつて、この祓が世に広く行われていたことを知ることができるとともに、羅山自身は作者について、「作者タシカナラズ」と見ていたことがわかる。なお、この点に関して『神道秘伝折中俗解』内清淨・外清淨ノ条では、「此外六根清淨ノ祓アリ。浮屠ノ者ノ神ヲシタヒテスルコト也」とも記しており、不明ながらむしろ仏者の手になるものと見ていたことが窺い知られる。要するに、羅山の時代にはそれだけ広く浸透していたということであろう。

羅山の関心の深さを何よりもよく示すのは、その著『神道要語』にこの祓詞が収録されていることであろう。それは次のようなものである。⁽¹³⁾

六根清浄大祓

天照皇太神乃宣久人被則天下乃神物須掌静謐。心被則神明乃本主莫令傷心神。是故仁目仁諸乃不浄乎見見、心仁諸乃不浄乎不見。耳仁諸乃不浄乎聞見、心仁諸乃不浄乎不聞。鼻仁諸乃不浄乎嗅天、心仁諸乃不浄乎不嗅。口仁諸乃不浄乎言天、心仁諸乃不浄乎不想。此時仁清久潔幾儻阿利。

諸法如影像 清浄無假穢

取説不可得 皆從因業生

我身被則六根清浄奈利。六根清浄奈留我故仁五臟乃神君安寧奈利。五臟乃神君安寧奈留我故仁天地乃神止同根奈利。天地乃神止同根奈留我故仁萬物乃靈止同體奈利。萬物乃靈止同體奈留我故仁所爲無願而不成就矣。

無上靈仁宝 神道加持

此六根清浄のはらひは兩部習合の説よりいつると見へたり。六根浄の事は仏書にあり。般若心経の体をもつて此はらひの詞をつくれり。終日火をいへとも口をやかすといふたとへに似たり。眼耳鼻舌身意を六根とす。色声香味触法を六塵とす。此六根六塵相まじわるときよく心得れば清浄なり。心経に不垢不浄といふはこれなり。若心得る事あたわされは、六塵にひかれて六根まどふ。故に、くらくにこりて清浄ならず。六根清浄なれば本心本より清浄なる故に、神明のやとるところきよくいさきよし。

この詞章を先の春意のものと比較してみると、一部に脱漏はあるものの、ほぼ同一の詞章とみることができるともつとも、これだけで、春意が「六根清浄大祓」を羅山から受けたと決めつけることはできない。というのも、先に引用した伊予小松藩での神道講談の記事に、「重富六根清浄大祓ヲ持シ來リ。是城州下賀茂縣主某モヨリ傳來スル處ノ祓ナリ。ト云フ。余披見スルニ。大抵卜部家本ノ如クニシテ。文句少々カハレリ」とあつて、「卜部家本」の「六根清浄大祓」の存在を指摘しているからである。特定の人からの伝授というよりは、当時、代表的な祓詞の一つとして広く流布していたためと見るほうが妥当であろう。

三、『六根清浄大祓浅説』における註釈の方法と思想

本書を著すに至つた事情は、冒頭の「題辭」によつて知ることができるとも、寛文七年（一六六七）六月に或る人の強い求めによつて「六

根清浄大祓」の講席を開いたところ、四〇数名の聴講者があり、その中の一人から「六根清浄大祓」の注解を作ること求められ本書が成ったという。⁽¹⁴⁾
 春意自身は、この祓を積極的に流布させようとの意図は持っていなかった。そのことは、「題辭」において、

吾^ル 師^ヲ 夕^ノ 顔^ヲ 巷^ノ 林^ノ 先生^{有^レレ} 言^フ。宗^源 神^道 者^ハ 中^臣 卜^部 忌^部 習^合 傳^之。兩^部 習^合 神^道 者。最^澄 空^海 等^之 沙^門。以^テ 佛^法 合^ニ 於^ニ 神^道。以^テ 胎^藏 金^剛 兩^界 合^ニ 陰^陽。遂^以 爲^ニ 神^佛 本^地 一^體。吁^ア 吁^ア。本^迹 緣^起 神^道 者。某^社 某^神。自^レ 古^傳 來^之 緣^起 有^レ 之。右^謂 之^ニ 三^部 神^道。此^上 別^有 理^當 心^地 者。人^多 不^能 知^レ 之。

と、羅山の言葉（『林羅山文集』巻六九に同文あり⁽¹⁵⁾）を引いて、世間の神道には宗源神道・兩部習合神道・本迹緣起神道の三つがあり、それとは別に理当地神道があることを示し、その上で、この「六根清浄大祓」を「兩部習合之淫詞。巫祝之妄談。不能勝用也」と断じていることから明らかである。にもかかわらず、春意がこの祓の注解を著わそうとしたのは、広く流布しているこの祓により人々が異端の教えに惑わされることを憂え、祓の意義を解き明かそうとせんがためであった。

それでは、兩部習合の妄説と見るこの祓を、春意はどのような立場から注解しようとしたのであろうか。これについては、『淺説』冒頭の祓の概説とも言うべき部分で述べられている次のような言葉が手懸かりとなる。

冷^齊 夜^話 云^ク。換^ニ 其^意。而^造 其^語。謂^之 換^骨 法。ト見^ヘ タリ。此^祓 三。佛^語 ヲ 借^リ テ。神^道 ヲ 明^サ シ ト テ。其^義 ヲ コトコトク 轉^シ 換^ヘ タリ。是^則 換^骨 法^ト ヤ云^ハ ン。此^祓 ヲ。六^根 清^浄 ト 號^ス ルニ。深^意 アリ。此^祓 ハ。常^盤 大^連 ガ 撰^ス ルナリ。常^盤 大^連 ハ。欽^明 帝^ノ 御^時 ノ 人^也 トゾ。欽^明 帝。佛^法 ヲ 信^ジ。神^道 ヲ 好^ミ ヲ 玉^ハ ズ。故^ニ 天^子 ノ 好^ミ ヲ 玉^フ 處^ノ 佛^語 ヲ 假^テ。此^祓 ヲ 作^リ テ。天^子 ヘ 奉^ル ト 云^傳 ヘ 侍^ベ ルナリ。

ここに引いてある『冷齋夜話』の言葉は、「換骨奪胎」の典故となったものである。ここで、春意はこの祓が「換骨の法」により著されたものであるとして、その視点に立って祓の詞句の本義を解説するのだという。では、その「換骨の法」とは何かといえば、春意の引用する言葉には脱漏があつて、このままでは明らかではない。正しくは、

不^レ 易^ニ 其^意。而^造 其^語。謂^之 換^骨 法。窺^ニ 入^其 意。而^形 容^之。謂^之 奪^胎 法。

とあるべきもので、引用では否定の「不」の文字が抜けている。ともあれ、換骨法とは意味内容はそのままにして表現を変えらることを言う。つまり、春意はこの「六根清浄大祓」は欽明帝が仏教に傾倒したために、祓というものを換骨法の手法を用いて仏語を借りて表現したものであると捉えているのである。このような立場に立って、春意はこの祓の字句を理当地神道の神儒一致の視点から解説している。

先にも述べたように、春意は自らを儒者と自己規定し、神道家とは一線を画していた。たとえば、神と人との心を媒介とする一体化における清浄の

重要性を、彼は次のように説いている。

心ノ不浄ナレハ人ト云ヒ。心清浄ナレハ神ト云。ト大抵ハ知ヘシ。此道理ヲ知ルトキハ。自己ノ神ノ義。自明カナラン。トソ覺ヘ侍ル。深ク味フテ知ルヘシ。清ク潔キ事アルヲハ。吾儒ニテハ。天理ト云フ。不清浄ナルヲハ。人欲ト云ナリ。天理ニ達スルヲ聖人ト云フ。神道家ニテ。神ト云モ同シキ道理ナリ。人欲ニ溺ル、者ヲハ。儒家ニテハ。下愚不肖ノ人トス。神道家ニテ云ハ、根國底國ニ。没落ル人ト云フナリ。

「神道家」の説くところを「吾儒」の立場から解釈するとかくかくであるといふこの説き方には、彼の儒者としての立場が明瞭に示されている。同時にそこで説かれる心の浄・不浄もまた「吾儒」の立場からは宋学における天理への随順と人欲への惑溺を意味するものと読み替えられる。つまり、ここでは六根清浄という仏教的価値観を柱とするこの祓詞が、儒教的価値観によって再解釈され意味づけし直されているのである。

もう一つ、彼の註釈法と思想を示す例を上げよう。「意仁諸乃不浄乎思也。心仁諸乃不浄不浄不浄不浄」といふ本文の註釈の末尾に、特に「春意按ずるに」として、次のように説いている。

春意按。大學云。欲正其心者。先誠其意。章句。心者。身之所主也。誠。實也。意者。心之所發也。此心ニテ。此段ヲモ見ヘシ。サテ心ノ主宰トナルモノハ何ソト云ニ。敬ヲ以テ。主宰トスルコトヲ大切ナリトス。箇様ノ處ニ至テハ。向上ノ工夫アリトシルヘシ。今更筆舌ニ述カタキコトナリ。

「意」と「心」の清浄という觀念を宋学の「誠意」「正心」の觀念によって理解せよというのである。さらに、その上で「心」の「主宰」としての「敬」に言及している点は、その後の垂加神道に至る近世儒家神道の流れを考える上で注目すべきことである。

このように儒教の普遍性に立脚し、神儒一致の立場から、この「六根清浄大祓」の意義を解き明かしたのが、本書なのである。したがって、その注解に引用される文献はほとんどが儒書である。その書名を網羅的に列挙すると次のようになる。

○国書 日本書紀・旧事紀（実は御鎮座伝記の文）・倭姫命世記

○漢籍 玉篇・說文解字・字彙・文選

論語・孟子・大学・中庸・易・書經・大戴礼・大学章句・孟子集註・程伊川「言箴」・呂大臨「克己銘」

仏典は全く認められず、国書についてもごく僅かであつて（これは「六根清浄大祓」の内容にもよるであろう）、ほとんどが漢籍であり、特に儒教の書物、中でも宋学が中心になっている。

最後に、春意がこの祓の偽作性についてどのような認識を持っていたかを考えよう。先に指摘したように、師羅山は既に『神道要語』のなかで、「此

六根清浄のはらひは兩部習合の説よりいつると見へたり。六根浄の事は仏書にあり。般若心経の体をもつて此はらひの詞をつくれり」と述べて、偽作なることを指摘している。春意もまた「題辭」において、本書を「兩部習合之淫詞。巫祝之妄談」と断じている。しかし、その一方で、本書注解のはじめに、「今此祓ニ云處ノ六根ノ沙汰ハ。釋氏ノ義トハ。大ニ異也。必シモ混雜シテ説ベカラズ」と説き、「此祓ハ。常盤大連ガ撰スルナリ。常盤大連ハ。欽明帝ノ御時ノ人也トゾ」と述べて、欽明朝に常盤大連の手になることを一応肯定している。この点、彼の史眼は羅山には及ばないと言えよう。ただ、祓詞中の「諸法如影像 清浄無假穢 取説不可得 皆從因業生」という四句の偈について、

諸法ト云ヨリ。此句マテハ。佛家ノ偈ニ似セテ書ケリ。後人ノ所爲ナルヘシ。諸家ノ説ニ。諸法ト云ヨリ。此句マテハ。神語ニシテ。深秘ノ説アリト云フコソ笑フヘキ事トソ覺ユ。カ、ル神語ハ。何レノ神ノ辞ソヤ。聞カマホシキコトナリ。

として、仏教の偈に基づくものであると説いて、これを「神語」なりと信奉する神道者を批判するとともに、これと類似の祓詞である伊勢流祓の「天津祝詞乃太諄詞」なるものについても、「兩部習合ノ邪説ニヨリナラフモノナリ」と否定していることは指摘しておかねばならない。思うに、彼は広く流布していた「六根清浄大祓」の存在を受け入れつつ、それを儒者の立場から全面的に意味付けし直すことによつて、中世的な祓の近世化を図つたものであろう。その意味で、彼は石田一良氏の指摘する羅山の「從俗教化」の精神、すなわち「俗習を直ちに打破するのではなく、俗習に従うことを通して儒教の教えを説こうとする」精神¹⁷の継承者でもあつたと言えよう。

これを要するに、本書は、羅山の理当心地神道の歴史的意義を考える上で重要な書であるとともに、仏教的価値観が支配的であつた中世から、儒教的価値観が優越する近世へという時代思潮の轉換の相の一端を具体的に示す好個の事例といふことができる。

最後に翻刻に用いた寛文八年の板本について、簡単に触れておこう。本書は筆者の所蔵するもので、袋綴一冊本、全二十四丁。末尾に、

六根清浄大祓淺説舊所刊行誤字有之故得善本正之者也

寛文八年初秋吉旦

中野半兵衛 開板

の刊記を有する。外題は題箋に「六根清浄大祓淺説 全」とある。冒頭に本書刊行に至る事情等を記した著者の手になる「六根清浄大祓淺説題辭」が付され、末尾には門人山本雲南の跋文がある。

翻刻に当たつてはできるだけ底本の字体を尊重したが、異体字・俗字等は正字体に改めた。ただ、一部本文のままとした箇所があり、その部分についてはそのことを明示するために(ママ)と付した。なお、「祓」の異体字である「秋」については吉田神道独自の用字法なので、底本のままとし改めなかつた。文中にあるへんでくくつた箇所は、本文では割注となつて示す。また、句点については、底本のままとした。

四、翻刻『六根清淨大祓淺說』

〔表紙題箋〕

六根清淨大祓淺說 全

〔本文〕

六根清淨大祓淺說題辭

夫^レ蹈^レ道^ト則^レ爲^レ聖^ト神^ト也。蓋^シ目^ノ之^レ能^ク見^ル。耳^ノ之^レ能^ク聞^ル。鼻^ノ之^レ能^ク嗅^ル。口^ノ之^レ能^ク言^フ。身^ノ之^レ能^ク觸^ル。意^ノ之^レ能^ク思^フ。皆^テ以^テ神^ヲ應^ジ物^ニ而^シ不^レ窮^マ。災^害不^レ及^ニ于^ニ其^ノ身^ニ。此^ヲ謂^フ六^根清^淨也。今^{コト}茲^ニ之^レ夏^ノ六^月。或^ハ人^ヲ請^フ余^ニ余^ニ講^ス。六^根清^淨大^祓。不^レ克^ク峻^ニ拒^ス。開^テ講^筵。來^リ聽^ク者^ノ四^十有^餘輩^ト。就^テ中^ニ一^客索^ク余^ニ余^ニ作^ラ之^ヲ。之^ヲ註^シ解^ス。余^ノ語^レ之^ヲ曰^ク。吾^ノ師^ト夕^顔巷^林先^生有^レ言^ハ。宗^源神^道者^ハ中^臣卜^部忌^部習^部習^部傳^之。兩^部習^合神^道者^ハ最^澄空^海等^之沙^門。以^テ佛^法合^ニ於^ニ神^道。以^テ胎^藏金^剛兩^界合^ニ於^ニ陰^陽。遂^ニ以^テ爲^ス神^佛本^地一^體。吁^ト。本^迹緣^起神^道者^ハ某^社某^神。自^レ古^ノ傳^來之^レ緣^起有^レ之^ヲ。右^ノ謂^フ之^ヲ三^部神^道。此^ノ上^ニ別^ニ有^ニ理^當心^地者^ハ。人^多不^レ能^ク知^ル之^ヲ。若^シ此^ノ解^者。兩^部習^合之^レ淫^詞。巫^祝之^レ妄^談。不^レ能^ク勝^テ用^ス也。浮^屠氏^以之^レ彼^佛合^ニ此^神。此^ノ不^レ藉^レ彼^レ。彼^ノ不^レ能^ク不^レ藉^レ此^レ。故^ニ動^ク輒^ク以^テ異^端混^ニ神^道。愚^者惑^テ而^レ不^レ悟^ラ。豈^ニ不^レ痛^シ哉^ト。古^人不^レ云^フ乎^ト。多^岐亡^レ羊^ト。汝^ノ其^レ念^レ茲^ヲ。於^テ是^ニ任^テ毫^毫盈^レ楮^ト。聊^シ記^ス大^概。號^シ曰^ク六^根清^淨大^祓淺^說。是^レ爲^レ塞^ニ其^ノ需^ト。

寛^文七^年龍^輯丁^未夏^六月^下澣^武藏^楚客^宮城^字伯^實書^ス

六根清淨大祓淺說

江城後學宮城春意撰

凡^ソ祓^ト云^ハ數^多ア^リ。延^喜式^ニ多^ク載^セタ^リ。延^喜式^ニノ^セサ^ル處^ノ祓^ラバ。式^外ノ^禊ト^云フ。抑^祓ノ^初ヲ^考ル^ニ。伊^弉諾^尊ノ^日向^ノ小^戸ノ^橘ノ^櫛原^ニシ^テ。水^ニ臨^テ祓^除シ^シ玉^ヲフ^ラ根^元ト^スル^故ニ。大^抵ハ^水邊^ニテ^祓ヲ^脩ス^ル也。又^素淺^鳴尊^ノ惡^逆ヲ^諸神^等ニ^嫌レ^テ科^スル^ニ千^座ノ^置戸^ヲ以^テ祓^レシ

宮城春意の字問と著述(一)

ハ。アナガチニ水邊トモ見ヘズ。然レバ水邊ナラデモ祓除スル也。漢土ニテモ。禊事ヲ脩ス。周禮詩經ナドニ見ユ。サテ六根ト云ハ。釋氏ノ説ニハ。眼根耳根鼻根舌根身根意根ヲ云也。六塵ハ色塵聲塵香塵味塵觸塵法塵也。六識ハ眼識耳識鼻識舌識身識意識也。已上三六十八界也。今此祓ニ云處ノ六根ノ沙汰ハ。釋氏ノ義トハ。大ニ異也。必シモ混雜シテ説ベカラス。冷齊夜話云。換其意。而造其語。謂之換骨法。ト見ヘタリ。此祓ニ。佛語ヲ借りテ。神道ヲ明サントテ。其義ヲコトコトク轉シ換ヘタリ。是則換骨法トヤ云ハン。此祓ヲ。六根清淨ト號スルニ。深意アリ。此祓ハ。常盤大連ガ撰スルナリ。常盤大連ハ。欽明帝ノ御時ノ人也トゾ。欽明帝。佛法ヲ信ジ。神道ヲ好ミ玉ハズ。故ニ天子ノ好ミ玉フ處ノ佛語ヲ假テ。此祓ヲ作りテ。天子ヘ奉ルト云傳ヘ待ベルナリ。六根ノ義ハ。此祓ノ本文ニテ聞ユ。清淨ノ二字ハ。司馬遷ガ史記ニ出タリ。然レバ佛書ノ字ト決シテ云難シ。佛書ハ後漢ノ明帝ノ時ヨリゾ中國ニ渡レリ。大祓トハ。大ハ。贊美ノ辞ナリ。廣大ノ道理アル祓ト云義ナランカ。祓ト云字ヲト部家ニ。禾偏ニカクコトハ。大ナル僻事也。委ハ余ガ撰ズル中臣祓纂言ニ記ルス。故ニ不贅レ此。

春意按スルニ。神道ニ。致齊散齊アリ。世ノ常談ニ。致齊ヲバ。内清淨ト云ヒ。散齊ヲバ。外清淨ト云フ。致齊散齊ノ事ハ。禮記ニ見ヘタリ。余竊ニ考ルニ。欽明帝。御治世ノ十三年ニ。百濟國ノ王ヨリ使者ヲ獻リ。釋迦佛像幡天蓋佛經ヲ獻ル。帝甚悦ヒ玉フ。大臣稻目。是ヲ拜シタマヘトス。ム。物部尾與等申上ケルハ。本朝ハ神國ナレハ。帝ノ拜シタマフ神多シ。イカテカ夷狄ノ神ヲ拜センヤ。恐ラクハ。本朝ノ神ノ怒ヲイタスヘシト言上ス。此ニ依テ。帝拜シタマハス。其像ヲ稻目ニ賜ヘリ。悦テ拜受ス。其家ヲ捨テ寺トシ。向原寺ト名ツク。且ツ佛像ヲ安置ス。コレ倭國ヘ佛法渡リテ。伽藍ヲ作ル最初也。幾程モナク。諸國ニ疫病ハヤリケレハ。尾與等。コレ佛ノ災ナリト申スニヨリテ。佛像ヲ難波ノ堀江ヘ捨テ。寺ヲ焼ケリ。其後帝再興シ玉ヘリ。此時分常盤大連此祓ヲ著述スルカ。常盤大連ハ天兒屋根命十九世ノ孫也。

天照 皇大神乃宣久

天ハ。上ニアリ。位ヲ以テ云フ。照ハ。徳ヲ以テ云。神徳ノ光輝發越スルノ意ナルヘシ。皇ハ。スヘラキトヨメリ。尊ンテ申ス義ナルヘシ。又皇ハ。大也トモ見ヘタリ。然レトモ。下ニ大神トアレハ。コ、ニハ用ヒ難シ。大神ハ。廣大ノ神徳マシマスト云義ナルヘシ。宣ハ。字書ニ布也通也トアリ。上ノ言ヲ。下ヘアマネク布通スルノ義ナルヘシ。宣命宣下口宣ナドト云ノ義ニ同シ。

日本紀云伊弉諾尊伊弉册尊共生ニ日神。號ニ大日靈貴。ヘニ云。天照大神。此子光華明彩。照徹於六合之内。故ニ神喜曰。吾息雖多。未レ有三若此靈異之兒。不宜久留此國。自當早送于天。而授以天上之事。是時天地相去。未レ遠。故以天柱一擧。天上也。

○又云。伊弉諾尊曰。吾欲生御宙之珍子。乃以左手持白銅鏡。則有化出之神。是謂大日靈尊。

又云。伊弉諾尊。至筑紫日向小戸橋之憶原。而祓除焉。然後洗左眼。因以生神。號曰天照大神。

先師羅山林夫子曰。夫伊勢八幡者。本朝二所宗廟。而君臣上下。各無不欽敬奉仕。浮屠氏見其如此。曰。本地佛也。垂迹神也。遂引神明入于佛氏。時君惑而不悟。至令其恣睢橫行。或奪神戶掠有封而納之于寺院。吁神何不罰之哉。

春意按。伊勢石清水稱宗廟。皇帝祖神。故也。賀茂松尾平野春日吉田等稱社稷。後朱雀院長曆三年八月。定爲二十二社。奉幣勅使。用其氏子。伊勢。王一人。中臣一人。卜部一人。齊部一人。

宣命紙者。伊勢用青色。賀茂用紅梅。石清水。已下用黃紙。

春意按スルニ。天照大神ハ。地神第一ノ御神也。治天三十萬歲ト神道家ニ申シ侍ルナリ。天照大神宮ト申ス時ニハ。天照大神。天手力雄神。萬幡豐秋津姬命。三座ラスベテ申スナリ。宮ノ字ヲツケヌ時ハ。天照大神。一座ノ御事也。豐受皇大神モ。宮ノ字ヲツケヌ時ハ。天御中主一座ノ御事也。

豐受皇大神宮ト申ス時ニハ。相殿ノ神ヲ合テ。四座ノ御事也。延喜大神宮式ニ大神宮三座。天照大神一座。相殿神二座。度會宮四座。豐受大神一座。相殿神三座。ト書タルハ此事也。是等ノ沙汰ハ。コ、ニ入申サヌ事ナレトモ。博聞ノタメニ。聊カ記シ侍ル。

人ハ。泛ク云フナリ。天子ヨリ公卿大夫士庶人マテヲサス。人ハ天地ノ中間ニアリテ。天人地ノ三才ナルモノナリ。殊ニ精神ヲ備テ貴キ物ナリ。

スヘカヲツカサトルシツメシツムルコトヲ
須^ス掌^ヘ靜^ツ諡^カ一^サ

諡ハ。玉篇云。靜也。コ、ニ云コ、ロハ。人ノ精神ヲ靜諡ニスル事ハ。至テ成リカタキモノナリ。心ハ。外物ニ移リヤスシ。故ニ放散スルコト多シ。其放心ヲヤムル時ハ。シツカニシテ安平也。此放心ヲ靜ニセント掌ルヲ。學者ノ專力トスヘシ。孟子告子上云。學問之道無他。求其放心而已矣。トアルモ是ニ能通セリ。文選嵇叔夜琴賦。

竦^ヲ肅^ロ々^ロ以^カ靜^ニ諡^ス。ト見ヘタリ。

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

宮城春意の字問と著述 (一)

心波則神明乃本主多利

心ハ。一身ノ主宰ニシテ。君主ノ位ナレハ。本來ノ主タリ。神明トハ。精神ノ明睿ナルヲ云フナリ。是ニ依テ。心ハ。神明ノ舍ト云ヘリ。朱文公孟子盡心上篇ニ註セラレシニハ。心者人之神明所以下具衆理而應萬事者也。ト云ヘリ。心ノ体ヲ以テ云ヘハ。衆理ヲ具ヘ。心ノ用ヲ以テ云ヘハ。萬事ニ應ス。心ハ本ヨリ虚ニシテ靈ナルモノナリ。大學ニテハ明德ヲ明カニスルヲ。先務トス。コレ云フ心ハ。本心ハ。神明ノ君主タリト云ヘトモ。一タヒ邪ニナレハ。内ニ主宰ナクシテ。客人ノ如ニシテ居ルカト思ヘハ。忽チ去ルナリ。コノ去ルヲ。止ムルヲ肝要トスヘシ。神ハ。明カニシテ正直ナル事。明鏡ノ如シ。清クシテクモリナキ故ニ。鏡ノ中ノ。カヲ略シテ。カミトヨメリ。猶秘説モアリトナン。神。玉篇市人切。神祇。説文。天神引ニ出萬物者也。夏書乃聖乃神。孔安國云。聖。無所不通。神妙。無方。易。陰陽不測之謂神。王弼云。神也者。變化之極。大戴禮云。陽之精氣曰神。陰之精氣曰靈。春意按。孟子盡心下篇云。大而化之。之謂聖。聖而不測之謂神。集註程子曰。聖不可知。謂聖之至妙。人所不能測。非聖人之上。又有二等神人也。日本紀神代上ニ。神聖ト書テ。カミトヨメリ。

莫令傷心神

本心ニ備ヘタル神氣ヲ破リソコナフコトナカレト云義也。已ニ静カナラスシテ。放逸ナレハ。傷レヤスシ。是マテ神語ナルヘシ。舊事紀云。雄略帝二十二年十一月。伊勢大神宮新嘗祭。夜深入。皆出。神物主忌部獨留。在。時皇大神。豊受大神。託倭姫命。宣言。人者。天下神物也。勿破心神也。神垂以祈禱爲先。冥加以正直爲本。

是故仁。目仁諸乃不淨見見。心仁諸乃不淨不淨見見。

是故トハ。上ヲ承テ。下ヲ起スノ辞也。是ヨリ常盤大連カ存分ヲ云ナリ。目ハ。明カニシテ。萬物ヲ見レハ。汚穢不淨ノ事ヲモ見ルト云ヘトモ。君主トナル心ニ見ヌヲ以テ本トス。目ハ士卒トナリテ。心ノ下知ヲ受ルモノナリ。下ノ耳鼻口身意モ是ニ準ヘテ知ヘシ。論語顔淵篇ニ。孔子ノ非レ禮勿レ視。トノタマヒ。中庸戒慎乎其所不睹ト云ヒ。孟子萬章下篇。孟子曰。伯夷目不視惡色。トモアリ。六根ノ中ニテ。視ルコトヲ切ナリトス。故

ニ先ツ視ルコトヲ云也。是ヨリ身ノ用ヲ云也。六ツノモノハ。中ヨリシテ外ニ應ス。目ニハ見テモ。心ニ見ルナト制スルハ。中心ヲ養フノ功夫ナリ。是能見ニ惑ハザルモノナリ。耳鼻口身意モ。コレニテ推察スヘシ。

耳ニ諸事ノケガラハシキコトヲキクトモ。心ニキカサルヲ以テヨシトス。是能聞ニ惑サルモノナリ。顔淵篇ニ。孔子ノ非レ禮勿レ聽トノタマヒ。中庸ニ。恐レ懼乎其所レ聞ト云ヒ。孟子ニ。伯夷耳不レ聽ニ惡聲トモアリ。譬ハ鄭聲淫乱ノコトヲキクトモ。心ノ移ラサルヤウニ。スヘキコトナリ。

鼻ニ諸物ノケカラハシキヲ嗅トモ。心ニカ、ヌヲ以テヨシトス。惡臭ハ。人ノ忌コトナレトモ。避カタキコトモアリ。只惡臭ノミニアラス。香氣ト云ヘトモ。深く著シテ。嗅度ト思ハ、不淨ト云ヘシ。是レハ能嗅ニ惑サルヲ云ナリ。

口ニ諸事ノ非法ナルケカラハシキコトヲ云トモ。心ニ言サルヲ以テヨシトス。假令ハ。人ノ惡ヲ稱シ。私欲ノコトヲ言ヒツナトスルノ類ハ。ケカレナリ。顔淵篇ニ。孔子ノ非レ禮勿レ言トノタマヘリ。易繫辭。言行君子之樞機。樞機之發。榮辱之主也。ト云ヘリ。伊川ノ言箴ニハ。發禁躁妄ト云ヘリ。是レハ能言ニ惑サルヲ云ナリ。

身ニ諸事乃不淨乎觸。心仁諸乃不淨乎不觸。心仁諸乃不淨乎不觸。

我身ニ。諸事ノケカラハシキコトヲフル、トモ。心ニフレサルヲ以テヨシトス。譬ハ惡人ト交ルハ。不淨也ト云ヘトモ。其惡人ニ我身ヲ化セラレヌヤウニスヘシ。顔淵篇ニ。孔子ノ非レ禮勿レ動トノタマヘリ。中庸ニ。君子和而不流。トモ云ヘリ。是ハ能身ヲ觸ル、ニ惑サルヲ云ナリ。

宮城春意の學問と著述 (一)

意仁諸乃不淨乎思^レ。心仁諸乃不淨乎不^レ想^ハ。

意ハ。心ノ發起スルヲ云ナリ。意ニハ諸事ノケカラハシキコトヲ思フトモ。心中ニ思ハサルヲ以テヨシトス。是意ヲ本心ヨリ。能制シタルモノナリ。心ニ一物ヲモタクハヘヌ處。則清淨ト云ヘシ。中心ニ利欲ヲ逞クシ。惡事ヲタクハフルハ。不淨ノ甚シキ人ナレハ。神モ箇様ノ輩ヲハ。深く惡ミ給フヘシ。可^レ恐^ル可^レ慎^ム。猶々功夫ヲ致シテ。心ヲ清淨ナラシメンコト肝要也。是ハ能意ニ惑サルヲ云ナリ。思ト想ト深淺アリ。思ハ深く。想ハ淺シ。思。玉篇云。願也。念也。深謀遠慮曰思。易。何思何慮。想玉篇云。思也。春意按。大學云。欲^レ正^ニ其^レ心^者。先誠^ニ其^レ意^一。章句。心者。身之所主也。誠。實也。意者。心之所發也。此心ニテ。此段ヲモ見ヘシ。サテ心ノ主宰トナルモノハ何ソト云ニ。敬ヲ以テ。主宰トスルコトヲ大切ナリトス。箇様ノ處ニ至テハ。向上ノ工夫アリトシルヘシ。今更筆舌ニ述カタクコトナリ。

此時仁清久潔幾偈阿利

目耳鼻口身意ハ。不淨タリト云ヘトモ。不淨ニ陷溺セマシト。本心ヲ正フスル時ニハ。清ク潔クシテ。神ト巳ト差別ナキコトヲ知ルヘシ。心ノ不淨ナレハ人ト云ヒ。心清淨ナレハ神ト云。ト大抵ハ知ヘシ。此道理ヲ知ルトキハ。自^レ巳^ノ神ノ義。自明カナラン。トソ覺ヘ侍ル。深ク味フテ知ルヘシ。清ク潔キ事アルヲハ。吾儒ニテハ。天理ト云フ。不清淨ナルヲハ。人欲ト云ナリ。天理ニ達スルヲ聖人ト云フ。神道家ニテ。神ト云モ同シキ道理ナリ。人欲ニ溺ル、者ヲハ。儒家ニテハ。下愚不肖ノ人トス。神道家ニテ云ハ、根國底國ニ。没落ル人ト云フナリ。倭姫命ノ。人ニ誨ヘテ曰フニモ。無^ニ黒^キ心^一以^ニ丹^心清潔齊慎^トアリ。

諸法如^レ影^ニ像^一。

諸法トハ。目耳口鼻身意ノ不淨ニ成コトアリトモ。本心ヲ清淨ニセヨトノ法度ヲサシテ云フナリ。譬ハ。人ノ像アレハ。影ノウツルカ如ク。本心ヨリ。六ツノ者ヲ制シテ。外物ニ中心ヲ動サレヌヤウニスルコトヲ速カニスヘシトノ義ナリ。一説ニ。諸ノ法ハ。影ト像ノ如ニ。我身体ニ相離レサル

ノ義トモ云へり。

清キヨクイサキヨアレハシカリニモケルハコト 淨ニ 無ニ 假ニ 穢ニ

中心イサキヨキ時ハ。外物ノタメニ。ケカサレズ。故ニ假初カクゾニモ汚穢ニ處スルコトナシ。穢。玉篇ニ云。凡不淨之稱。

取トラハコトヲ 説ス 不カク 可ク 得ク。
皆コトハ 從レ 因レ 業ヲ 生ス

上ニ云處ノ目耳鼻口身意ハ。タトヒケカル、トモ。中心ヲ。イサキヨクセヨトノ義ハ。只説話ノミニテハ。會得スルコトナリカタシ。上ニ云處ノ道理ヲ。中心ニヨクヨク合點スルヲ要トセヨトノ義ナリ。

皆ナヨリソハナコノミトハナル 從レ 因レ 業ヲ 生ス

目耳鼻口身意ハ。不淨ナリトモ。本心ヲ清淨ニセントノ一念ノ發スル處ハ。譬ハ。百花ノ青春ニ咲初カ如シ。花散リテ以後。コノミハ成就スト云ヘトモ。一花開初ハクムル時ニ。實ミヲ成スノ理ヲ備ヘタリ。最初ニヨリ從フ處ヲ。清淨ニスレハ。我ワザナス業ハ。皆善ニラモムクナリ。此外ニモ説々多シ。諸法ト云ヨリ。此句マテハ。佛家ノ偈ゲニ似セテ書ケリ。後人ノ所爲ナルヘシ。諸家ノ説ニ。諸法ト云ヨリ。此句マテハ。神語ニシテ。深秘ノ説アリト云フコソ笑フヘキ事トソ覺ユ。カ、ル神語ハ。何レノ神ノ辞ソヤ。聞カマホシキコトナリ。余昔シ一柳山城太守源直治ノ佳招ニ應シテ。豫州小松ニ赴キ。論語并古文眞寶ヲ講談ス。直治ノ采邑ニ。高賀茂大明神ノ社アリ。其神主ヲ陸奥守藤原重富ト云フ。重富直治ノ命ニ依テ。余カ旅館ニ來テ。神道ヲ聽ク。重富余ニ請ヒ。高賀茂ノ拜殿ニ於テ。中臣禊ヲ講釋セシム。來リ聽者五六十輩アリ。講談了テ。重富六根清淨大祓ヲ持シ來リ。是城州下賀茂縣主某ヨリ傳來スル處ノ祓ナリ。ト云フ。余披見スルニ。大抵下部家本ノ如クニシテ。文句少々カハレリ。諸法ト云ヨリ。此ニ至マテ。萬葉書ノ如シ。是ニ依テ按スルニ。下部家本ニ此ノ四句ヲ偈ノ如クニ書スルハ。後人ノ佛語ヲ學ンテ。ナスコトトソ覺ヘ侍ル。或云ケルハ。中臣祓ノ。天津祝詞乃太諄詞。ト云ハ。白衆等各念。此時清淨偈。諸法如二影像。清淨無二假穢。取説不レ可レ得。

シカクナカラヨツテコトナヘコノミヲナス。皆シカクナカラヨツテコトナヘコノミヲナス從レ因業シ生ル。則太祝詞ナリ。右ノ點ハ。岩手祭主ノ流ナリ。左ノ點ハ。粥見祭主ノ流ナリ。兩家共ニ。大中臣嫡流也。今暫クコ、ニ記シ侍ル。筒様ノ事モ。兩部習合ノ邪說ニ。ヨリナラフモノナリト知ルヘシ。

我身波則六根清淨奈利。

一念ノ發起スル處ヲ。ケカスマシキトテ初ニ因リ從フ處ハ。花ノ咲初ムルニ似テ果ハ。イマタ見ヘスト云ヘトモ。終ニハ。成就シテ。コノミトナルカ如キ故ニ。我ナス業ハ。コトコトク。善ナリ。シカルトキハ。ヲノツカラ。六根ノケカル、コトナシ。

六根清淨奈留我故仁。五臟乃神君安寧奈利。

六根既ニケカル、コトナケレハ。五臟(マヤ)ノ神君モ安寧ト。ヤスク。ヤスラカニシテ。危殆ナルコトナシ。五臟(マヤ)ハ。心肝脾肺腎ヲ云也。神君トハ。タマシヒヲ云フ。君ハ。尊テ云フナリ。五臟(マヤ)ノ神ノ名ヲ。ツケタル說アリト云ヘトモ。覺束ヲホツクナシ。故ニ。コ、ニ記シ申サヌナリ。此ヨリ以下ハ。一段ハ。一段ヨリモ。向上ニ言ヒ述フル者也。心ヲツケテ見ルヘキナリ。

五臟乃神君安寧奈留我故仁。天地乃神止同根奈利。

己カ五臟(マヤ)ノ神。ヤスクシテ。アヤウカラサレハ。天神地祇ト根本ヲ同フスル處ニ至ル。是又功夫ヲ積ンテ知ルヘシ。

天地乃神止同根奈留我故仁。萬物乃靈止同體奈利。

天神地祇ト。根本同シケレハ。萬物ノ靈ト。体ヲ同フスル也。萬物ハ禽獸草木等ノ類ヲ云。世ノ常談ニ。天地萬物同根一体。ト云コトヲ。口ニハ云ヘトモ。其理ヲ知レル人ハ。マレナリ。書周書泰誓上惟天地。萬物父母。惟人。萬物之靈云々。呂與叔克己銘。凡厥有レ生。均レ氣同レ體云々。靈。字

彙云。神也。體。字彙云。身也。此字註。コ、ニ合ヘリ。

萬物乃靈止同體奈留我故仁。所爲無願而不成就矣。

萬物ノ靈ト。同体ナルカ故ニ。我ナス處ノ願ハ。コトコトク成就セスト云コトナシ。是ソ誠ニ。神道ニ達スル人ト云ヘシ。中庸。致中和天地位焉。萬物育焉。トアルニ同シ意也。參合スヘシ。此段ニ心得アリ。我ナスホトノ願ノカナフトテ。私欲ニシテ。公共ナラサルコトヲ願ハ。サリトテ。カナヒカタシ。元來ヨリ。心中清淨ノ人ハ。富貴功名ヲ求スト云ヘトモ。自ラ得ルノ理アリ。ト知ヘシ。若君父ノ爲ニ。臣子ノ所願アラハ。必ス成就スヘシ。然レトモ。義ニカナハヌコトナラハ。所願ヲ遂クマシキ也。神ハ非禮ヲウケスト云フ世話ハ人々ノキクコトナリ。サテ此破ノ義ヲ。説クニ。六根清淨ト名クルニ泥ンテ。佛理ニ合シテ云人アリ。淺間敷コトナリ。倭姫命世紀ニ屏ニ佛法息奉レ再拜神祇トコソアレ。是大切ナル御教トコソ覺ヘ侍ル。可守可慎。

春意按スルニ。天地萬物ハ元來吾ト一体ナリ。故ニ吾心正直ニシテ清淨ナレハ。天地ノ神ト同体也。天地ノ神ト同体ナル故ニ。何事ヲ祈願スト云テモ。成ラスト云コトナキノ效驗アリ。是ソ神道ノ極功ニシテ初ヨリ神道ハ吾ヲ離レテナキ物ト知ルヘシ。學者省察功夫スヘシ。此抄解ニハ。大略ニ説キ申スナリ。重ねテ詳ニ申侍ラン。

丁未之季夏二十有六日

萩花堂人

春意先生嘗爲人著六根清淨大祓淺説周悉詳盡也。後之學神道者可披卷而得其理矣。於是乎書

門人難波津山本雲南

六根清淨大祓淺説舊所刊行誤字有之故得善本正之者也

寛文八年初秋吉旦

中野半兵衛 開板

注

- (1) 岩橋小彌太「理当神道切紙」(同氏著『神道史叢説』所収)
- (2) 神道大系・論説編二〇『藤原惺窩・林羅山』解題、五九頁。なお、矢崎浩之氏の紹介している『神道伝授』の神宮文庫蔵写本(一門二三六号)の奥書も、この東北大学附属図書館所蔵本と全く同文である(『林羅山』神道秘伝折中俗解』小考)、『神道宗教』一三三三号所収。
- (3) 復刻版『大祓詞註釈大成』下、解題、八頁。
- (4) 『六根清浄大祓浅説』については、筆者所蔵の寛文八年刊の板本による(本稿に翻刻)。以下、同じ。
- (5) 『中臣祓纂言』については、復刻版『大祓詞註釈大成』下による。以下、同じ。
- (6) 『神道大意演義』については、筆者所蔵の寛文八年刊の板本による。以下、同じ。
- (7) 矢崎浩之『升堂記』については『林家塾入門者記録』(『いわき紀要』二二号)一柳直治については『新訂寛政重修諸家譜』第一〇、一六〇頁による。
- (8) 板元の「中野半兵衛」は寛文八年に本書をはじめ『中臣祓纂言』『神道大意演義』などの春意の書を一齐に出版している。井上隆明氏によれば、この書肆は江戸芝三田二丁目にあり、本書の他、寛文十二年に『貝おほひ』を出版している(『近世書林板元総覧』四二七頁)。
- (9) 出村勝明『吉田神道の基礎的研究』第一章第一節「六根清浄大祓」の成立、参照。
- (10) 神道大系・論説編二〇『藤原惺窩・林羅山』、三四〇頁。
- (11) 同書、三九三〜三九四頁。
- (12) 同書、四一〜四二頁。
- (13) 『六根清浄大祓浅説』本文末尾に「丁未之季夏二十有六日」とあり、六月二十六日であったことがわかる。
- (14) 『林羅山文集』下巻、八六三頁。なお、この文章を取めている巻六九は、寛永年間(一六二四〜四四)の著述を収録する巻である。
- (15) 『冷斎夜話』巻一の言葉。『禅学典籍叢刊』第五巻、七六九頁。『禅学典籍叢刊』所収本は五山版の影印本であるが、本書には他に寛文六年刊行の和刻本がある。
- (16) 神道大系・論説編二〇『藤原惺窩・林羅山』解題、四四頁。また、同氏「林羅山の思想」(日本思想大系二八『藤原惺窩 林羅山』解説)参照。
- (17)